

子どもの学びの充実をめざした授業づくり

—教室の中の対話的關係の構築に焦点を当てて—

M16EP004

齋藤 知美

1. 問題と目的

今の子どもたちが成人して社会で活躍する頃には、社会の有り様が大きく変化していくことが予想されている。新学習指導要領解説の改訂の経緯の中には、「このような時代にあつて、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。」と記されている。(文部科学省, 2017).そこで、このような社会の変化に対応していくためには、どのような子どもを育てていくのか、そのためにはどのような学びが必要なのかを考えていくことが重要であり、これらの準備をしていくことが、今学校に求められている。

ここでいう「学び」とは、子どもが将来学校以外でも「自分で学べる子ども」になることを目指し、授業において「どのように学んでいくのか」といった学習過程を重視した子どもの「学び」であり、学力向上のみを目指したものではない。筆者が考える「子どもの学びの充実をめざした授業」とは、

- ・子どもが課題を自分ごととして捉え、興味を持って授業に取り組んでいる。
- ・子どもが自己決定している。
- ・子どもが友達と考えを交流する中で自分なりの気づきがある。

以上の3つの視点から見た子どもの姿が学習過程の中にあり、このような学習過程から、「分かったつもり」ではなく、子どもが「本当に分かった」という状態になることを

目指している。そして、このような授業の中で子どもは、各々のものの考え方、捉え方を交流し合うことで、他者との差異に気づき、そこから多くのことを得て、自分なりの理解や経験に生かし、自分自身の力を高めていく。このような学びができた時に、子どもの学びは、充実すると考える。

このような子どもの学びを可能にするためには、その土台として、安心して自分の考えを語れる温かな雰囲気を作り、子ども同士の温かなつながりが構築されていくことが必要になる。つまり、相手の言葉に耳を傾け、相手に応じた言葉がけができる温かい関係（以後これを「対話的關係」と言う）を構築していく必要があると考える。この対話的關係を構築していくためには、生方（2017）が「人と人との距離を縮めるためには、接する回数を増やす必要があります。意見を率直に言える関係を築いていくためにはその経験、練習が必要です。」というように、まず、子ども同士が接して話す機会を増やし、友だちとのやり取りを楽しめる手立てを考えていく必要があると考えた。

本研究の目的は、まず、子ども同士の間に対話的關係を構築するためには、どんな手立てが有効かを探り、次に対話的關係を構築していく中で、子どもの学びの充実をめざした授業を行い、子どもの学びの充実をめざした授業における3つの視点から見た子どもの姿を検討していく。

2. 方法

(1) 対象校 山梨県内の公立小学校

- (2) 期間 平成 29 年 4 月～12 月
- (3) 対象児童 第 3 学年児童 (23 名)
- (4) 実施方法

① 対話的関係を構築するための手立て

子ども同士の対話的関係を構築するために実施した活動とそのねらいは、以下の表 1 の通りである。(表 1)

表 1 実施した活動とねらい

	活 動	ね ら い
日 常 に お い て	① 一分間対話	友だちの話を聞いて、それに応じた言葉がけ(質問・感想)を言う練習をする。
	②お楽しみ給食	様々な友達と関わり合う機会を持つ。
授 業 に お い て	③構成的グループエンカウンター	本音の交流や感情交流ができる関係をつくる。
	④教室ファシリテーション(ペア対話・ワールドカフェ)	コミュニケーションの量と質を高め、全員が言いたいことを言い、学べる場を作る。

ここに示した活動を通して、子ども同士の対話的関係がどのように構築されていったかを、子どもの言動を観察することや活動後の振り返りの記述を分析することを通して検討した。また、筆者が授業後に自らの教師の働きかけについて指導教官からアドバイスを頂いたことをまとめた実習記録から、教師のファシリテーションの在り方も検討した。

②学びの充実をめざした授業実践

対話的関係を構築していく中で、子どもの学びの充実をめざした授業を行い、子どもの学びの充実を目指した授業における 3 つの視点から見た子どもの姿を、子どもの言動を観察することや活動後の振り返りの記述を分析

することを通して検討した。

3, 結果と考察

(1) 対話的関係を構築するための手立てとその成果と課題

①一分間対話

一分間対話とは、ほぼ毎朝、朝の会で友だちとテーマに沿って対話をして、友だちの話したことに対して、質問感想をする活動である図 1 のように「一分間対話のやり方」を子どもに示した。(図 1)

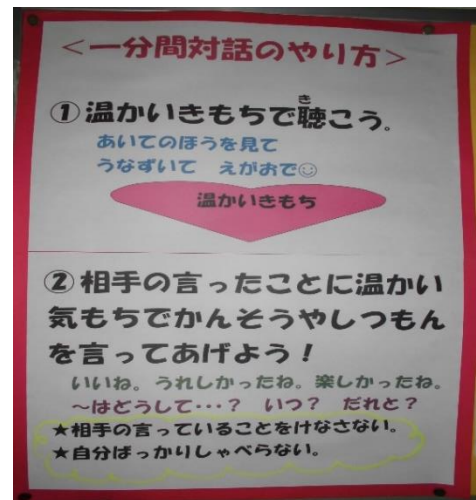


図 1 一分間対話のやり方

約束事は、話を聞くときは、相手の方を見て、頷きながら笑顔で温かい気持ちで最後まで聞くこと、更に相手の言ったことに温かい気持ちで質問や感想を言うことである。

まずは、一分間対話のやり方にそって、一分間で 2 人でのやり取りができるようにした。このやり取りがある程度できたところで、話をじっくりと聞くということを意識するためにひたすら相手の話を聞く時間と、それに対して質問や感想を言う時間を分けて行った。更に、2 学期からは、人数が増えても対話することができるように 3 人で対話を行ようにした。

はじめのうちは、友だちが話している途中で我慢できずに話してしまうこともあったが、一分間対話を繰り返して行くうちに約束事を意識して、相手の方を見てうなずきながら話を聞くことができるようになっていった。

また、一分間対話を続けていくうちに、人の話を質問や感想を言うことを前提に聞いているため、疑問を持って話を聞き、質問をする姿が見られた。このように子どもが話を聞きとったり、それに応じて質問したり感想を言ったりする力が身についていくことを実感した。

更に、一分間対話をする前に10秒で相手を見つけて話す活動をしたことによって、子どもが「あまり話さない子とも話せてよかった。」という感想があったように、テーマに沿ってクラスの誰とでも話す機会を持つことができた。授業においても、「〇〇について、隣の人と話してごらん。」と教師が言うと、すんなりと話すことができていた。

また、子どもの感想に「毎日違う人と話せて楽しかったです。」とあったり、一分間対話を時間の都合でできない時があると、「したかったのにな。」という残念そうに言うこともあったりする様子を見ると、子どもが1分間対話を楽しみにしていることも伺えた。

以上のように一分間対話をするにより、相手の話を最後まで聞くこと、それに応じて質問や感想を言うことといったスキルを身につけたり、子どもが楽しみながら、クラスの誰とでも話すことができるといった温かい人間関係を形成したりすることができるのではないかと感じた。

しかし、課題として、対話が盛り上がる時とそうでない時があったりしたので、テーマの設定は吟味する必要があると考えた。また、続けてやっていくうちにマンネリ化してきたので、様々な仕掛け（今日の日直がテーマを決める、対話サイコロをふるなど）をする必要があると感じた。更に、質問はしてい

るものの同じような質問を繰り返している様子や、質問したいけど言い方が分からないという様子があった。そこで、次の図のような「質問の種類」を提示した。（図2）

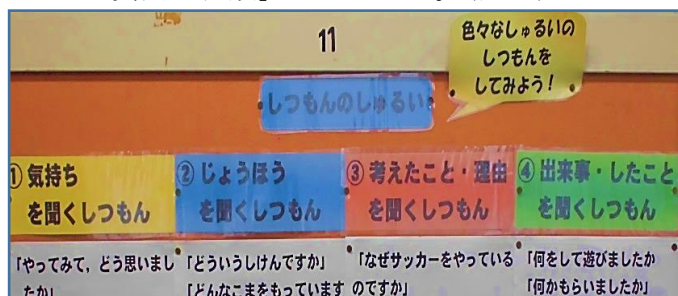


図2 質問の種類

これは、子どもたちが実際に対話の中でしていた質問を4つのカテゴリーに分けた物である。また、一分間対話をする前に、この4つの質問の種類を確認し、これをみながら、色々な種類の質問をするように支援していきました。更に、時々対話が終わったとどんな質問をしたかを子どもに問いかけ、「これは、情報を聞く質問だね。」とカテゴリーに分けて返すことによって、子ども自身が色々な種類の質問を意識できるようにした。この質問の種類を提示することによって、「こういうときは、こういうふうに聞けばいいんだ」と質問の仕方を知り、質問のレパトリーを増やしていくことができた。

②お楽しみ給食

お楽しみ給食とは、週一回金曜日にくじを引いて、くじに書かれた番号の席に座るといものである。

教師がうっかり忘れていて、「先生、今日お楽しみ給食だよ。」と子どもの方から言ってきたり、同じグループになった友達に「今日一緒だね。」と嬉しそうに言ったりする様子を見ると、子どもがお楽しみ給食を楽しみにしていることが伺えた。また、「今日のグループの人、みんな動物飼っているんだ

よ。」とグループの友だちの共通点を見つけたりしているグループもあった。子どもの振り返りの記述にも、「お楽しみ給食は、くじなので誰となるか分からないので、ドキドキして、全然話さないことも仲良くなれてよかった。」とあった。

このようにくじにより偶然同じグループになった友だちと話す機会を定期的なことで、あまり気が合わない友だちとも話すことができてきた。例えば、4月当初、「私は、Bさんきらい。」と言っていたAさんが、Bさんと同じグループになった時に、楽しそうに話していた。また、一分間対話の時もAさんがBさんに「やろう。」と声をかけている場面もあった。この活動をすることによって、授業中、自分の考えをペアで交流する場面において、すぐに相手を見つけて、だれとでも話すことができるようになっていったことが実感できた。

③構成的グループエンカウンター

各学期の子どもの様子やその時期の子どもに身につけさせたい力を考え、年間計画を立てて、特別活動の時間に月に一回エクササイズを行った。子どもの実態に合わせ、やり方を変更したところもある。(表2)

この活動を「絆プロジェクト」と呼び、子どもたちには、「みんなで仲良くなり絆を深めるための活動」であることを伝えた。以下、一部ではあるが、エクササイズをした時の教師のファシリテーションの在り方、また、エクササイズを通しての子ども全体の変容、2名の子どもの変容を述べていく。

ア、教師のファシリテーションの在り方

構成的グループエンカウンターを行うに当たり、はじめは教師のファシリテーション上手くいかないことが多かった。ファシリテーションとは、「参加者の主体性を促し、集団が

表2 構成的グループエンカウンター年間計画(3学期はまだやっていないため省略する)

学期	月	エクササイズ	エクササイズのねらい
一学期	4	他己紹介	相手から必要なことを聴いたり、それを友達に分かりやすく伝えたりする力を育む。また、学級のリレーションづくりをする。(学級開き)
	5	質問じゃんけん	相手に関心を持って質問することで級友のことを知り、学級内のリレーションづくりをする。
	6	聖徳太子ゲーム	1人では難しいことを、グループの協力によって成し遂げる体験を通して、リレーションづくりをする。
	7	いいとこさがし	友だちの良いところ目を向けさせ、友だちを肯定的に受け入れていこうとする受容的な学級の雰囲気を作る。
二学期	8	バースデーライン	非言語コミュニケーションによって、無言でもみんなで協力しながらバースデーラインを作れる喜びを感じる。
	9	人間コピー (ゲスト講師による授業)	廊下にある絵と同じ絵をグループで協力しながら完成させていく活動を通して、連帯感、一体感や互いを尊重する気持ちを味わう。
	10	ほめあげ大会	クラスみんながお互いを認め合う体験を通して、自己肯定感を培う。
	11	無人島 SOS	多様な考えのあることを知り、お互いに認め合う人間関係をつくる。
	12	クリスマスツリー	グループの協力と団結によって、課題を達成する喜びを味わう。仲間への信頼感を高める。

ある目的を達成するためのプロセスを促進したり、支援したりすること」である。

そこで、その中から教師のファシリテーションの在り方について学ぶ部分が大きかった「聖徳太子ゲーム」「いいとこさがし」についてのみ詳しく述べていく。

まず、「聖徳太子ゲーム」であるが、このエクササイズは6月に行い、これまでのペアから少し規模を広げて3～4人のグループ（班）の単位で行った。例えば、6月に行った聖徳太子ゲームでは、「班の友だちと協力してチームワークを高めよう。」というめあてで行い、「競争ではなく、班でどのように協力できるかが大切」と、教師が言葉がけしていったが、活動の途中から勝ち負けにこだわって、活動のめあてを忘れてしまったり、答えを書く順番でもめてしまったりした。結果、この日の活動の中で、めあてを達成できた子が少なくなってしまった。

そこで、子どもがきちんとめあてを達成できるように、教師のファシリテーションの在り方を見直した。まず、順番ややることを明確に指示すること、めあてや約束、やるべきことを確認しながら進めること、活動中、各グループを回り、必要に応じて言葉がけを行うことである。これらのことを実行することによって、7月に行った「いいとこ探し」では、もめ事もなく集中して活動を行い、めあてを達成することができた。

このように、月1度の構成的グループエンカウンターでは、ルールが毎回違い、教師も子どもも初めての活動を行うため、見通しがつきにくい。よって、一つ一つの活動を確認して進め、活動に集中させて、めあてをきちんと達成させるために教師のファシリテーションが重要になると考えた。

イ、絆プロジェクトを通しての子ども全体の変容

これまでの絆プロジェクトを振り返っての子どもたちの記述に「振り返ったら、協力と

なかよくができていた。」「絆プロジェクトをやると、仲良くなるし、協力もできるし、力もあわせられるから、もっと続けていきたいです。」とあるように、絆プロジェクトをやることによって、自分たちのクラス集団がいい方向に向いていることを実感しているようだ。例えば、運動会の前にゲスト講師に授業して頂いた「人間コピー」は、協力してグループで一つの絵を完成させるといったエクササイズを通して、「協力することの大切さ、必要性」を実感できるものであった。この授業の後、授業で学んだことを生かし、運動会の練習や本番も仲間と協力して声を掛け合い、みんなで頑張ることができた。保護者の感想からも「みんなが協力して頑張っている姿に感動しました。」とあった。また、ある子が母親に「3年2組は団結するとすごいんだ。」と誇らしげに話していたそう。更に、個別懇談のうちに、あまり友だちができてくることが心配な子の母親が「クラスの子が温かくいつも助けてくれ、たくさん友だちができてうれしいです。」と語ってくれた。学期の始めのころは、自己主張し合い、険悪な雰囲気になることが時々あり心配したが、絆プロジェクトを積み重ねることによって、その都度大切なことに気づき、少しずつ助け合える温かなクラスを築いていくことができてきたことが喜ばしい。

ウ、絆プロジェクトを通しての2名の子どもの変容

話を聞くよりも自分が話したいC児、話し合いにあまり積極的ではないD児が、この絆プロジェクトを通して大きく変わったので紹介する。

C児は、話をすることが大好きな反面、人の話をあまり聞くことがあまり得意ではないが、「最後まで相手の話を聞く」というルールのもとにやった「無人島 SOS」で、Eさんの話を遮って話し始めようとした時、自ら「Eさん、ごめん、最後まで話して」と相手の話を最後まで聞こうとしたり、別の場面の話し合いで

もあまり意見を言っていない子に「〇〇さん、なにもいってないけど、言いたいことある？」と聞いてあげたりする姿が見られた。

D児は、反対にあまり話し合いにおいて積極的に意見を言わない子である。そんなD児が、「無人島 SOS」の話し合いで、「最後まで相手の話を聞く」というルールがあったため、自分の話を最後まで聞いてもらえるといった安心感が持てたのか、グループの友だちに自分の考えを主張している姿が見られた。その後、それをきっかけに自分の考えをみんなの前で堂々と発言する姿も見られた。

以上のことから、子どもの実態に合わせながら構成的グループエンカウンターを行っていくことによって、クラスの様々なタイプの子どもが、本音の交流や感情交流ができる関係を作っていくことが分かった。それが授業において、友だちの間違いを「惜しいです。」と温かく修正したり、のびのびと自分の考えを発言したりできる姿になっていると思われる。

(2) 学びの充実をめざした授業実践

①授業実践の計画

*** 単元名：**場面の移り変わりを捉えて、感想を書こう

*** 教材名：**「ちいちゃんのかげおくり」(物語) あまんきみこ

*** 単元計画の概要 (全 1 1 時間)：**

表 3 のように授業計画を立て、授業を行った。(表 3)

表 3 単元計画の概要

時	主な学習活動 (★は、その時間の主発問)
1	①題名から想像しよう。「ちいちゃんて何歳ぐらいかな？」 「かげおくりって何だろう？」 ②物語を読んで感想を書こう。
2	③言葉の意味を調べて、物語を理解しよう。 ④かげおくりをしてみよう。
3	⑤感想や疑問を発表して、課題を決めよう。
4	⑥一の場面の出来事を読んで考えよう。★かげおくりをし

	ているちいちゃんは、幸せそうだけど、幸せは続いたのかな？理由も考えてみよう。
5	⑦二の場面の出来事を読んで考えよう。 ★一人ぼっちになったちいちゃんは、どんな気持ちかな？
6	⑧三の場面の出来事を読んで考えよう。 ★三の場面では、ちいちゃんは、さみしいままかな？ どうしてそう思うのかな？その理由を考えよう。
7	⑨四の場面の出来事を読んで考えよう。 ★四の場面のかげおくりは、一の場面のかげおくりと同じですか。どうして、そう思いますか？ ★家族と会えたちいちゃんは幸せだったのかな？
8	⑩五の場面の出来事を読んで考えよう。 ★ちいちゃんの時代の暮らしと、現在の様子を比べてみよう。
9	⑪あまんきみこさんは、五の場面に平和な暮らしを書くことで、読む人に何を伝えたかったのかな。ワールドカフェで話し合ってみよう。
10	⑫感想文の書き方を知って、一番心を打たれたところの内容を考えよう。
11	⑬自分の感じたことが伝わるように工夫してちいちゃんに手紙を書こう。

※4, 5, 6, 7時においては子どもからされた課題も解決した。

②学びを充実させるための手立て

子どもの学びの充実をめざした授業にするために、この単元において、子どもの学びの充実をめざした3つの視点において、以下のような手立てを考えて授業実践を行った。

ア、子どもが課題を自分事と捉え、興味を持って授業に取り組むことができるようにする。

- ・初発の感想を出し合い、みんなで考えていきたい課題を設定する。
- ・ペア対話やワールドカフェを使って、だれもが対等に話せる環境を作る。
- ・センテンスカードなどのしかけを使って、子どもの興味を引く工夫をする。
- ・子どもが考えたくなるような「発問」をする。

イ、子どもが自己決定をする。

- ・ネーム磁石を黒板にはって、自分の立場をはっきりさせる。

- ・自分が解決したい課題を選ばせる。

ウ、子どもが友達の考えを交流する中で、自分なりに気づきを持てるようにする。

- ・子ども同士が聞き合える環境を作る。
(コの字型の席，教師の言葉がけ)
- ・自分の考えを書く時間を確保する。
- ・ペア対話，全体対話による交流を行う。
- ・ちょっとしたつぶやきを拾い，発言をつなげるようにする。
- ・友達との対話をしたときに，いいなと思うところをメモさせる。
- ・友達との対話の後で，自分の考えの変容を「振り返り」記述させる。

③3つの視点から見た子どもの学びの姿

以上のような手立てを講ずることによって子どもの学びの充実をめざした授業における3つの視点から見た子どもの姿が見られた場面を，いくつか紹介する。

第4時 1の場面の出来事を読んで考えよう。

「かげおくりをしているちいちゃんは，どんな気持ちかな？」という問いにおいて，隣の友だちとペア対話を行うことによって，いつも発言しない子も，友だちと生き生きと自分の考えを話し，その後の教師の「友達とどんなことを話した？」という問いかけに，挙手をして発言していた。

このようにいつもは積極的に発言しない子もペア対話をすることによって，友だちと楽しそうに話し，挙手をして発言するなど，興味をもって授業に取り組むことができていた。

第6時 3の場面の出来事を読んで考えよう。

「3の場面では，ちいちゃんは，さみしいままかな？ どうしてそう思うのかな？」

という問いに

- 1，さみしくなくなった
- 2，さみしいままだった

という3つ立場から1つ選び，またその理由を考えた。そして，ネーム磁石を黒板に貼って立場をはっきりさせた。この発問について話し合っている時に，友だちの発言を静かに聞き合い，また，友だちの発言したことに対して，「ちょっと，〇〇さんの言ったことに質問があります。」と質問している姿があった。

自分のネーム磁石を黒板に貼って立場をはっきりさせ，自己決定することによって，自分の考えを明確に示し，友だちの考えとの違いに気づくことができた。更に，振り返りの記述の中に，

★授業後の振り返りの記述

- ・「さみしくなかった」にしたけど，(友だち意見を聞いて)「もっとさみしくなった」と思ってきちゃいました。
- ・わたしは，「さみしいまま」だと思っていただけ，「もっとさみしくなった」に変わりました。特にKTくんとKNちゃんのお兄ちゃんを思い出してしまった」という意見がいいなと思いました。
- ・信じていたとかいろいろ意見が出て，おもしろくて，私も次は，もっと考えを増やしたいです。

とあり，全体交流の場で，友だちの考えを聞いて自分の考えが揺さぶられたり，友だちの考えの良さに気づいたり，意見をやり取りすることを楽しんでいる姿がみられた。つまり，子どもが友達の考えを交流する中で，自分なりに気づきを持つことができていた。

④授業実践を終えて

子ども同士のやり取りの中で，子どもが心に思ったことを躊躇することなくつぶやいたり，友だちの意見に対して質問したり，それに答えたりしながら，読みを深めることができた。また，発言することが苦手な子もペア

対話を取り入れ、友だちと自分の考えを交流することによって、全体の場で発言しやすくなっている姿も見られた。

その土台となったのが、対話的關係つまり、それぞれの考えを聞き合い認め合い、それに対して質問や思ったことの言える温かい關係がクラスの中にあっただからだと考える。

しかし課題として、一分間対話では、友だちの話を最後まで聞くことはできているものの、授業の中で自分の考えを話したいために、友達が発言している時に遮って話し始めたり、友だちの発言の後、すぐに反論したりする姿が見られた。そこで、友だちの考え最後まできちんと聞いた上で、相手が本当に話したいことを知り、まず受け入れてから、自分の考えを話すことができるように支援し続け、それを習慣化していく必要があると考えた。

4、全体考察

これまでに、子どもが他者との対話によって自分の考えを深めていくために、話し合い活動において、話型指導を試みたこともあったが、なかなか子どもが話さない、結局話し合いが深まらないという結果になった。その解決策として、子ども同士の対話的關係を構築することが必要なのではないかと考え、本研究において、その具体的方法を探ってきた。

そこで、対話的關係を構築するために、主に「一分間対話」と「構成的グループエンカウンター」を行った。まず、「一分間対話」によって、友だちの話を最後まで聞き、温かい気持ちで質問・感想を言うという力をつけて、この力を蓄積させていくこと、そして、構成的グループエンカウンター(絆プロジェクト)によって、特別活動の1時間の授業の中で「協力すること」「人の話を最後まで聞くこと」などの価値に気づいて学んでいき、温かい人間關係を築いていくこと、この両輪があってこそしっかりと「対話的關係」が構築され

ていくのではないかと考えた。これを年度当初から仕組んでいくことに意味があり、更に一年間ではなく、発達段階に応じて継続していけば、より大きな効果があるのではないかと感じた。

さらに、対話的關係が構築されていく中で、子どもの学びの充実をめざして授業を行い、学びの充実を目指した授業における3つの視点からの子どもの姿を学習過程に見ることができた。それは、対話的關係の構築で培ってきた、誰とでも話しやすくなったり、互い意見を認め合ったりすることが授業の中で、生かすことができていたからだ。つまり、この「対話的關係」が、授業において、子どもの学びを充実させるための一つの手立てとして有効であることが分かった。

今後も対話的關係を構築していく中で、子どもの学びの充実をめざして各教科において手立てを講じて授業を行い、内容面の充実をめざして、更に研究を進めていきたい。

5、引用文献

- ・上杉春樹. (2017). 児童の人間關係の深化を促す試みー学級活動の充実を通してー. 「平成28年度教育実践報告書」 pp17~24
- ・岡田弘. (2014). 小学校人間關係づくり. 学事出版
- ・生方直. (2017). 授業をアクティブにする365日の工夫. 明治図書
- ・国分康孝. (2009). エンカウンターで学級が変わる. 図書文化
- ・文部科学省. (2017). 小学校学習指導要領総則. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/07/12/1387017_1_1.pdf